

「すごかつこいい！ クラスのみんなが智乃さんのこの格好を見たら、腰を抜かすだろうなあ」

「そう。よかった」

はにかむ智乃を、塔子がはやしたてた。

「あらあ、なんだかしおらしすぎて気持ち悪い、うぐっ！」

塔子の背後から黒いものが現われ、マフラーのように顔に巻きつき、口と鼻をふさいだ。智乃の背中から伸びた闇の翼が、蛇のように忍び寄っていたのだ。

「うぐぐぐぐ」

塔子は翼を剥がそうとするが、実体のない闇が相手なのでどうにもできない。

塔子のうめき声もどこ吹く風という様子で、静夜先生が護へ尋ねた。

「ねえ、護君は今からどうしたいかな？」

「どうしたいって……」

いずれも男心をそそるスタイルの美女と美少女を見つめて、護は口ごもってしまった。塔子はまだじたばたしている。

（せっかく四人もいるんだから……でも、そんなことを言うのは）

担任教師が率先して告げた。





「せっかく四人いるのだから。当然、みんなで敷石君に気持ちよくしてもらいましょうね。もちろん、わたしたちも敷石君を気持ちよくするの」

「賛成！」

と美月がはたとしっぱを振る。

「いいわ」

と言つて、智乃が塔子の口から翼を背中に戻した。

解放された塔子が、まったく息を切らさないで叫ぶ。

「殺す気か！」

「塔子はそれくらいでは死なないでしょう。一時間でも息継ぎなしでプールに潜っていられるくせに」

智乃はまだ文句を言う塔子を見捨て、ベッドのふちに腰かけた護のパジャマのズボンに手をかけた。

「わたしが脱がせてあげるわ」

ズボンとトランクスがいつしよにおろされる。クラス委員長の顔をめがけて、包皮をかぶったペニス^たがそり勃った。龟头を前にするだけで、智乃の瞳が赤く染まった。智乃が手を伸ばそうとすると、まわりから三本の手がさっと入ってくる。静夜先生、

塔子、美月も護の前に膝をついて、たった一本の勃起へ熱い視線を集中させた。

（ああ、四人に見られてるだけで、たまらない）

合計八個の瞳の集中砲火を浴びて、肉茎がさらに硬くそそり勃った。すかさず四組の親指と人差し指が包皮のはしをつまみ、息もぴったりに剥きおろした。

露出したピンクの亀頭に、四方から四枚の舌が殺到して、たちまち見えなくなってしまう。

「あつ、はうううっ！」

護はたまらず腰を浮かして、ペニスを跳ねあげた。重なった舌が複雑にからみ合い、亀頭全体を隙間なく舐めている。半分はふざけていたとはいえさっきまで言い合っていた智乃と塔子が、巧みに共同作業をしている。直接肉体に加えられるひとりのフェラチオでは不可能な刺激と、なにより自分の股間に宝山学園でも有数の美女四人が頭を埋めている光景が、膨大な量の快感を生んだ。

「ああ、た、たまらない。ち、智乃さん、来て。智乃さんのすべてを見せて」

吹き荒れる悦楽の嵐に揉まれて、護はなかば無意識に欲望を口にした。

智乃がペニスから顔をあげて、闇の翼をひろげ、ふわりと浮きあがった。護の顔の前でとまり、空中でMの字の形に足をひろげた。

護の目の前に、白い肌にとまる小さな蝙蝠が浮いた。人間には不可能な空中の媚態が、護の視神経を直撃する。

「智乃さん、そんな格好して」

「ああ、恥ずかしいわ」

自分からやっておきながら、智乃は羞恥に身悶える。これまでは智乃が護の血を飲んで、躁状態になつてセックスしていた。今がはじめての素面での体験だ。他の三人、とくに塔子がいるからこそ、思いきつてできた気がする。

護はある予感を持つて、智乃の股間の蝙蝠に手を伸ばした。小さな羽の一端をつまむと、推測どおりに蝙蝠はシールのようになつていて、簡単に剥がすことができる。静夜先生の所有物らしい仕掛けだ。

蝙蝠がベッドの上に落ちて、レオタードの網目の中心に空白が生まれた。そこに智乃の秘密が存在している。童貞喪失のとき以来、智乃の裸を目にするのは四度目だが、これほどあからさまに女性器を見つめるのははじめてだ。護の体の奥から新鮮な悦びが泉のように湧いてくる。両手を浮いたまま智乃の腰にまわして、自分の顔に引き寄せ、女肉の花園に鼻と口を埋めた。女の極上の香りと味が、五感を支配する。

「んんっ、あああ……」

智乃が深い喘ぎ声をあげて、翼をばたつかせた。両手の指を護の髪にからませて、くしゃくしゃとかき混ぜる。

護の股間では、残った三人が口唇の愛撫をつづけていた。今は射精させないように、塔子が右の内腿を舐め、静夜先生が左の太腿に唇を這わせ、美月が睪丸をていねいにしゃぶっている。射精のスイッチは入らないが、下半身を舐め溶かされる愉悦が、護を極楽へといざなった。

（智乃さんのを舐めながら、三人に舐められるなんて、ああ、夢みたいだ。夢ならずつと醒めないでほしい）

より深く智乃を味わうために、舌をせわしなく動かす。

「んっ、あっああ」

智乃が喘ぎ声とともに、内腿で強く護の頬を挟んだ。翼の羽ばたきがより激しくなり、天井まで浮かびあがらないのが不思議なほどだ。護にも、智乃が大きな快感に身を浸しているのがわかる。

「んっ、んああっ、護君、もう、わたし、イッチャう」

今までよりも早い。かつてないスピードで智乃は頂上へと飛翔しようとしている。

「ああっ、いいっ、イクうつ!!」